

悪性隔絶魔界都市
新宿

ハイカラさんかれあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔界都市の美貌の人探しを元にした神様転生者の話。

魔界都市要素は能力と外見だけです。

単発ではなく連載になつたので独立しました。

淫獄都市ブルースの方もよろしく。

目 次

(IV)	激・悪性隔絶魔界都市〈新宿〉——序章——	65
(III)	小ネタ もしも屍山血河舞台下総国にあ る人が来たら	47
(II)	悪性隔絶魔界都市〈新宿〉——幕間—— ある夢での出会い	52
(I)	続・悪性隔絶魔界都市〈新宿〉——序章——	16
	新・悪性隔絶魔界都市〈新宿〉——序章——	30

悪性隔絶魔界都市〈新宿〉——序章——（I）

『——塙基配列 ヒトゲノムと確認

——靈器属性 善性・中立と確認』

『ようこそ、人類の未来を語る資料館へ。ここは人理継続保障機関 カルデア』

『指紋認証 声帯認証 遺伝子認証 クリア。魔術回路の測定……完了しました。登録名と一致します。貴方を靈長類の一員である事を認めます』

『はじめまして。貴方は本日 最後の来館者です。どうぞ、善き時間をお過ごしください』

1、

「でち……こない……じ……ゆ……れん……たれ……だけ……やめ……」

無人の廊下で一人の少女が呻いていた、夢の中で悪夢に苛まれいるのかその表情は苦悩に歪んでいる。

その姿を見かねたのか小さな白い動物が近寄つて頬を舐めた。

「フオウ……？ キュウ……キュウ？ フオウ！ フー、フオーウ！」

「あの。朝でも夜でもありませんから、起きてください、先輩」「……はっ!? ここはどこ、君は誰? わたしはアイドルとシャンシャンしていたはずでは!」

10連で☆4以上が優雅たれしかこなかつた? でも、それは夢や。
夢の中の出来事は実際の世界には関係ないんですよ?

「メルヘンやファンタジーあるまいし夢の世界があるわけないじゃないですか」つて典明がいつてた。

……あれ、鏡の世界だつけ? けど鏡の世界はあつたような?

「シャンシャン? ここはどこかは簡単ですが、私が誰かはいきなり難しい質問なので、返答に困ります。名乗るほどのものではない——とか?」

動物の鳴き声に続いて控えめでどこか無機質な声が響き目を開くと明らかに日本人ではない白衣に眼鏡をかけた少女がそこにいた。

これが藤丸立香とマシュ・キリエライトとの始まりの出会い、これから始まる長い長い旅の始まりの終わりだった。

2、

「そう、マギ☆マリは最高なんだよなんでそれがわかんないかなー!」「まだ続くのその話、ループって怖くない?」

あの後、マシユと、なんだかサークルとかにいそうな格好のレフ教授と話したりして
り色々あつた後に全員が集まつた時に眠気に襲われうつかり寝入つてしまいブリーフ
ティングルームから追放されました。

しうがないのでフオウくんと呼ばれる白い小動物を肩に載せて自室に割り当てられた部屋に行つたら、アメコミの眼から光線を放つミュータントヒーローみたいなバイザーを付けた黒尽くめの人物となにやら興奮して捲し立てている白衣を着た人物の二人がいた。

「あつ、誰か来た。」
「こんにちは、悪いね騒がしくて」

「あ、はどうも」

白衣の男性はちらつとこちらを向いていきなり叫び出した。

明らかに助かつたー”という声色のバイザーをつけた男性はもの凄い美声の持ち主であつた、顔半分が隠れているのに整つているとわかる容姿に思わず頬が熱く、赤くなつた。

よく見れば騒いでた白衣の人も顔は整っていた。

「誰だつてか、そうです、わたしが藤丸さんちの立香さんです」

「誰？」

イケメン二人に注目を浴びるというかつてないシチュエーションにちょっとテンパつてネタ発言をぶっぱなしてしまった、これじゃ変なおばさんだよ！

……開き直つてネタ発言を続けることにひやつはー!! もう何も怖くないZe★

「そういう貴方達こそ誰ですか？」
今日からこの部屋はわたしだけの『世界』だぜ？」

卷之三

「嘘だろ承太郎！」

「『ウソ』は いつてない皮膚と汗だ……」いつには やると言つたら やる…

「スゴ味」があるツ！」

三人揃つて、ふつと口元が緩む、ピシ、ガシ、グツ、グツ、グツ。

友情は時として時間をかけずに花が咲くこともあるのだ、彼らは分かり合えた。

藤丸の奇妙な冒険始まつたな。

「それで、ええと君は静・ジョースターなんだつけ?」

「そういう君はロマニ・アーキマン」

「いやそれはもういいですから、というか名作で海外翻訳もでてますけど日本の漫画に詳しすぎじゃないですか？」

初対面にも関わらずネタ発言をしたら同じ作品ネタで返してくるとは中々に話せる二人だが、このノリに付き合つていたらいつまでたつても話が終わらないので先を促す。

「いやあー、ここに居るいつわくんに勧められたけど面白いね！　作品の根底にある勇気で運命に立ち向かうっていう人間贊歌が素晴らしいよマギ☆マリ程じゃないけど！」

「喜んで貰つて勧めた甲斐があるけどネットアイドルと比べられてもなー」

「何度もいふけど最高じゃないかマギ☆マリ、なんでわからんかな！」

「だつて女アイドルの中の人が男とかあるじやんネットアイドル」

「マギ☆マリに中の人などいない！」

「おーい、もしもーし」

あれれえ？　おかしいなーいつの間にか立香さん蚊帳の外だよ。

初対面の女子を置き去りにするこの二人のキャラの濃さに逆に困惑してくるよ。

わたしはついていけるだろうか？　わたしが眼中にいない二人の世界のスピードに。

「フォウ、フォー（いやいるよ中の人、ろくでもないクズ男だよ）」

「いや、話を最初に脱線させて悪かつたけどさー結局だれだよ二人とも」

なんやかんやで今度こそ会話を進めるに成功した。

「ボクはどこからどう見ても健全な、眞面目に働くお医者さん、医療部門のトップ、ロマニ・アーキマン。

なぜかみんなからDr. ロマンと略されていてね。理由は分からぬけど言いやすいし、君も遠慮なくロマンと呼んでくれていいとも。

実際、ロマンって響きはいいよね。格好いいし、どことなく甘くていいかげんな感じがするし」

「栗はマロンだから甘いのはきっと錯覚」

「はじめまして、ドクター」

ゆるふわな性格でドルオタだけどなんとなくいい人みたいな気がする、ドルオタだけど。

「ええーと、そつちの頭の中をかきまわされてしまったA級ジャンパーみたいな人は?」「名前は秋いつわ、確かに黒ずくめでバイザーフォーマーつけてるけど……結構前のアニメよく知ってるね、某ロボゲー参戦ユニットの元ネタ調べるタイプ?」

「Yes, That's right.」

「おーいえー、逸材だ。……別にコスプレとかじやなくてこの職員が目に悪いから付けろっていうからね」

そういうつてバイザーを撫でた、表情がよく見えないが苦笑している？

「？？　目の病気なんですか？」

「どっちかというと目に病気というか、病気にさせるというかそんな感じだよね」
よく分からぬがなんだか色々事情があるらしい、ドクターはフオウくんを手懐けようとして鼻で笑われたことにショックを受けていたが、こちらの会話に横から入つてきた。

「察するに君は今日來たばかりの新人で、所長のカミナリを受けたつてところだろ？
ならボクたちと同類だ。何を隠そう、ボクと彼も所長に叱られて待機中だつたんだ。」「バイザーはずせといわれて外したら外したで文句言われて、邪魔になるつて追い出すとかひどい話だよ」

「ボクも所長に『口マニが現場にいると空気が緩むのよ！』って追い出されたしねー、最近荒れてるよね……しようがない部分もあるんだけどね」

「若くして立場が得るいろいろ面倒くさい」

二人して所長のヒステリーで追い出されたらしい、もしかして昼寝してしまつて所長が激おこぶんぶん丸で追い出したのはすでに追い出したこの二人がいたからでは？「でも、そんな時にキミが来ててくれた。地獄に仏、ぼつちにメル友とはこのコトさ。所長ないものたち同士、ここでのんびり世間話でもして交友を深めようじやあないか！」

「なにする、ゲームでもする？ それともアニメ鑑賞？ ネットアイドルは語らせると長いので却下ね」

「(・・・) そんなー」

秋さんはガサゴソ部屋の片隅から色々と物を引っ張り出してきた、元空き部屋（現在はわたしの部屋）でサボつて遊ぶためのグッズをたくさん持ち込んでいるらしい、この二人は職場に何しに来ているのだろうか？

「別にわたし、ぼっちじゃないけど」

「な……来たばかりの新人なのにもう友人がいるなんて、なんてコミュ力なんだ……！ あやかりたい！」

「ドクター友達いないしね」

「ひどい！ 自分はぼっちとは違うみたいにいうけど君だつて友達いないだろ！」

「と、友達はペペとキリシュタリアいるし、なんだか他に避けられてるのは性格関係ないし……（震え声）」

ついぽつちという言葉に反発してしまったが二人のトラウマを切開してしまつたらしい。

やだ、この二人わたしと同じ目をしている……。

違うし、友達いたし、ただ付き合いが浅く広かつただけでぼっちじゃないし（謎の言

い訳)

献血からの拉致されて始まつたこのアルバイト、なんとかやつていけるような気がしてきました。

3、

「——いま医務室だろ？ そこからなら二分で到着できる筈だ。」

だらだらと雑談に混じつてカルデアのことを探してたら突然入ってきたレフ教授の要請にドクターがあわあわしていた、秋さんは漫画を読んでいる。

「ここ医務室じやないですよね、サボってるから……」

「あわわわわ、そ、それはいいっこなしだよ、……まあいやボクみたいな平凡な医者が少しくらい遅れても問題ないし、それよりBチームのいつわくんはレイシフトの実験開始だからサボりはここまでだ」

「はいはい」

マイペースに漫画を読んでいた秋さんはパタと漫画を閉じて巻数順に並べ始めた。

聞いた話によるとドクターのようなサポートスタッフではなくわたしと同じ実験メンバーの立場らしい。

しかもわたしのような飛び入り一般枠ではなく選抜チームのメインメンバーに選ばれているエリートだとか。

……それなのに堂々とサボるつて凶太すぎイ！

「いいんですか？ ゆるゆるというかぐだぐだな感じでレフ教授に怒られません？」
「おや、彼と面識があつたのかい？」

「マシユと話してたら声をかけられて雑談しました」

「ああ、友達ってマシユのことだつたのか、まあそだね呼ばれたならいかないとね、落ち着いたら医務室を訪ねに来てくれ。今度は美味しいケーキぐらいはご馳走するよ。いつわくん連れてつてくれ、そうすれば間に合う」

「はいはい」

秋さんが指を開いて閉じてを繰り返しながらドアを開けると、急に明かりが落ちた。
「なんだ、明かりが消えるなんて……」

「始まつたか…」

ドクターが呟くと轟音が響き渡り館内放送がながれた。

『緊急事態発生。緊急事態発生。 中央発電所、及び中央管制室で火災が発生しました。 中央区画の隔壁は90秒後に閉鎖されます。

職員は速やかに第二ゲートから退避してください』

『繰り返します。 中央発電所、及び中央——』

「今のは爆発音か!? 一体なにが起つている……!? モニター、管制室を映してく

れ！ みんなは無事なのか!?」

「……ひどい…………管制室つて、あの娘は……？」

映し出された映像はあちこちが焦げ付き瓦礫が散乱しているという正に災厄に見舞われたといわんばかりに惨憺たる有様であつた。

そして管制室という場所にはあの少女がいたことを思い出す、自分を先輩と呼ぶなんだか浮世離れした雰囲気を持つあの子……。

「これは――立香くん、すぐに避難してくれ。 ボクたちは管制室に行く。 もうじき隔壁が閉鎖するからね。 その前にキミだけでも外に出るんだ！ いつわくん出してくれ！」

「了解」

そういつてドクターは秋さんの腰に抱きついた、よくわからないが何らかの手段で秋さんは早く移動する手段を持つてゐるらしい。

なんとなく視線を感じて肩に乗つてゐるフオウくんの方を向くと、もの言いたげな目でこちらをじつと見てゐるような気がした。

……うん、そうだ。 このまま逃げだすのは多分違う、わたしは何だか、……そう思つた。

「――わかってるよフオウくん。 マシユを助けに行こう！」

「フォウ！」

そういうつてわたしもフォウくんを片腕に抱いてドクターの反対側から秋さんの腰に抱きついた。

「まさかボクたちに付いてくるつもりなのか!?」 そりやあ人手があつた方が助かるけど……ああもう、言い争つてる時間も惜しい！ いつわくん、早く連れてつてくれ！」

「はいはい、落ちないようね」

そういうと身体がふわっと浮いてジエットコースターに乗つたかのように視界が後ろに流れていく、高速で移動し始めて髪が後ろに靡いた、なんだこれ怖い！ どうなつてるの!? いきなりの理解不能な状況に秋さんにぎゅっと抱きつき、腕に抱えたフォウくんが潰されて「むぎゅ」と悲鳴を上げた。

「うわあああああ！ 原理は聞いたけど、やっぱ怖いぞこれ————！」

「声がでかい……」

ドクターが悲鳴を上げて、耳元で叫ばれている秋さんは五月蠅そうに憮然としていた。

4、

蒼天が人の心に希望をもたらすとするなら、吹雪が止む気配のない場所にいる現状は希望とは無縁なのであろうか？

白い結晶はなおも嵐のような風と共に吹きすさび、周囲を覆い尽くさんとばかりに建物の壁に叩きつけられ続けていた。

荒れ狂うただただ白い景色に時々交じる他の色が雪以外のものがあるという証明だった。

そんな風景をただ窓からじつと眺め続ける黒ずくめの少年がいた、名を『秋いつわ』。いわゆる転生者と呼ばれる神と言う名前の超越存在に見初められた人間の一人である。

生前のことは何も覚えていない、山深い場所で特殊な技術を持つ人間たちが作った集落で育つたいわゆる『山育ち』といわれる環境で生を受け、物心がついた頃に自分が『そう』と気づいた、否、思い出した。

生来的に茫茫とした捉えどころのない性格だったので周囲から変化に気づかれなかつたが、思い出してからずつとあることばかり考えていた。

「型月世界のどの作品に転生した?」

TYPE-MOONは『月姫』の外伝である『MELTY BLOOD』から入つて『月姫』、『月姫PLUS-DISC』、『歌月十夜』セットの『月箱』、『Fate/stay night』、『Fate/hollow ataraxia』、『空の境界』etc と一通り経験済みの歴戦の型月ファンだったが実際に行くことになるとは思つても

見なかつた。

能力やキャラクターは好きだが生きるのには難易度が非常に高い世界なのだ『ここ』は。

なにせ後に世界屈指の実力者になる特殊な才能の持ち主である主人公、

『月姫』の『遠野志貴』、『F a t e / s t a y n i g h t』の『衛宮士郎』。

この二人でもゲーム版だと死にまくつてバッドエンド劇場が開けるレベルである。

下手な才能があるとみんな大好きケイネス先生みたいになるので、モブとして穏やかに生きればいいと思うかもしれないがモブも登場すると容赦なく死ぬので、関わるなら『幸運EX』のスキルでもないと安心できない。

単に才能だけでなく幸運と常人離れしたメンタルがないとこの先生きのこれない世界である、(奈須)_{創造神の名前}きのこだけに。

更に言うとモブとして生きるのには山育ちの時点でも厳しいのだが、一番の問題は……。

「うーん、この顔じや絶対無理」

鏡に映る顔を眺めて呟いた、そこに映るのは見るものを陶然とさせる天工が作り出したとしか思えない月輪玲瓏とした美貌の持ち主がそこにいた。

あらゆる者を魅了する美貌と1000分の1ミリのチタン鋼操る魔界都市ブルー

スの主人公、『秋せつら』の容姿である。

古い作品なので知らない人がいると思うのでわかりやすく言うと『HELLSING』に登場するウォルターの元ネタである。

……『HELLSING』もちょっと古いか？

『輝く貌』『魔貌』と言われる美貌で人生狂わされたデイルムツドもびっくりの顔で普通に生きるのはどうあがいても無理、ゲーなので、なぜだか里で伝わってる妖糸の技を磨きまくつて必殺な仕事をする家業を続けてコネを広げ情報ネットワークを形成して。

「どの作品に転生かわからないけど知ってる原作の要素が出たら回避すればいいじゃん！」と思いつ至り。

妖糸の腕を磨き続け（転生者補正なのかやはり天才だった）、早十数年。

「ようこそカルデアへ。歓迎するよ。」

南極大陸にある人理継続保障機関フイニス・カルデアに就職しました！

……なんでさ？（正義の味方感）

続・悪性隔絶魔界都市〈新宿〉—序章—（II）

前回までのあらすじ

藤丸立香♀がカルデアに入館しました！

カルデアが爆破されました！

遡ること数年前に転生者の秋いつわくんがカルデアに就職しました！

「なんですか」

1、

あの人を初めてみた時のことはよく覚えている。

まだまだ短い人生の中でこれ以上に綺麗なものをこれから先に見ることがないだろうと確信できる人だつた。

驚いたのはそれなのに彼は自分を飾らず自然体でなんというか——自由だつた。

ある日たまたま二人だけで話す機会があつたので彼に直接聞いてみた。

日常の中にあつて突き抜けて特異な『モノ』を持つているのにどうしてそんなに気取らずにいられるのか。

『顔については会う人によくいわれるけどそれが当たり前なんで気にしたことはないか

な

『周囲と自分との違いとかは気にならないんですか?』

『うーん、同じぐらいの顔面偏差値の友人が昔一人いたし』

『貴方と同じくらい綺麗な人間が他にいるんですか!?』

『なんかいたね、従兄弟も仮面つけてるけど同じような顔してるんじゃない?』

『世界は広いですね……、やはりご両親も同じぐらい綺麗なんですか?』

『普通だった気がするけど昔の話なんで覚えてないかな』

『あっ、…………すいません悪いことを聞きました』

『いや別に、よくあること(フィクションのキャラの家族構成には)』

我ながら単純で呆れる。

この上ない綺麗な顔で強烈に惹かれるだけでなく。

自分と違い特別な『才能』を持つても周囲の期待や羨望をどこ吹く風。ありのままに振るがずにただ自分らしくある姿に私は……。

「デュエルだキリシュタリア、決着をつけよう!」

「ほう、私にデュエルを……受けて立とう!」

「開始の合図をしろペペ!」

「わかつたわ、……デュエル開始！」

「先行は貰った、アンタップ、アップキープ、ドロー！」

「MTGかよ！ そこは遊戯王にしろよ！」

いつわとペペとキリシユタリアの三人の奇行にカドックがツッコミを入れていた。

先日カドックは三人に面白半分に性転換する薬を飲まされて（その後対価として魔術の研究を手伝わせていた）

ダ・ヴィンチに同類を見るような目で見られたりしていた。

そんな目にあっても相変わらず三人組に関わろうとする所にカドックの人の良さが垣間見えていた。

私とマシユみたいに距離をとつて見るか、この場から足早に去つた他の三人の様に関わらないようにすればいいのに。

「これが友人同士のやりとりですか、なるほど…」とマシユは興味深そうに目を輝かせている。

オフェリアはもう一度視線をマシユから三人に変えて遠目に眺めながら口元に柔らかい笑みが浮かんでいた。

これが在りし日のAチームが過ごすありふれた日常の光景である。

2、

前略、お袋さま元気でしょうか？

仕事場で知り合つたDrロマニという人物によると（ガチャのし過ぎで）お金に困つていたので二つ返事でOKして就職した人理継続保障機関フィニス・カルデアフという組織は人類が絶滅するという結果を観測してそれを回避することを目的に結成された国連承認の団体だつたようです。

正直胡散臭さ大爆発ですが今更気が変わつたので帰ります（へへ

といつて帰ることも出来なさそうなので社会人へと一步を踏み出そうとしたのですが。

来てそろそろ爆発事故というトラブルに巻き込まれ、知り合つたマシュー・キリエライトという少女が巻き込まれて瀕死の重傷を負いました。

その時にわたしが出来たこと言えば彼女の手を握つて「大丈夫だよ」と繰り返すことしか言えませんでした。

そんな無力なわたしが気がついたら冬木という街に居ます。

炎上する都市の中でおちこむこともあるけどわたしは元気です。
『なにをやつてるんだい立香君？』

「遺書を書いてます」

「ふおう!?

『縁起でもないよ!?』

そう言つて明かりのない和室の机の上にあつた便箋の用紙に筆ペンでつらつらと文章を書いていた立香は顔を上げた。

小説投稿サイトで低評価を貰つたことのある程度の文章力なので当然遺書書きなど知らないのでかなり適当である。

なお当時書いていたジャンルはボーアイズがラブつてあるよくあるジャンルであつた。「死ぬつもりはないけど遺書を書く機会つてないので書いてみようかなーって」

H A H A H A と陽気な声をあげて、ぱりぱり頭を搔いてから持っていた筆ペンを置いて立香はフォウの頭を撫でた。

「良ーし、よしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよし
ねいいね！よしよしよしよしよしよしよしよしよしよし
い子だフォウくん」

ふお!

「それで靈子転移でしたっけ？」
レイシフト

今いるのは西暦2004年の冬木という地方都市、そこにある武家屋敷の一室であ

る。

『そう、難しい話をするとそこは”特異点”と呼ばれる正確な時間軸から切り離された場所になつているんだ。

通常の時間旅行よりは簡単に出来るのはいえコフインなしでよく意味消失に耐えて

くれたよ。

大体のことはわかつてくれたかい?』

「所々 黒歴史を思わせるワードが出てくるなあぐらいにしかわかりませぬ!」

きつぱりと答えた。

あまりにも堂々とした態度は清々しく。

爽やかさすら感じた。

『ええー!? いやでも、そこは理解してもらわないと』

「大丈夫だ、問題ない」

『それダメなやつ!』

「大丈夫だよドクター。わたしも、これから頑張つていくから」

『よくわからないけど最期のお別れっぽい台詞はやめてくれ!』

『冗談はさておいて細かい事情はともかくわたしは生きる為に全力で頑張るだけです』

「——うん、まあ、そうだね。いつわ君もレイシフトに成功してそちらに向かっている

んで合流してなんとか頑張つて生き残つて……!? マズイ立香君逃げてくれ！」ふんすと気合を入れる立香を見て一瞬呆気にとられたが口マニは納得したように頷いた。

しかしぬるべく次の瞬間に慌てて声を荒げて空間に投影されていた画像が途絶える。

唐突に切れた通信に向かつて呼びかけるが反応はなく。

ステルスゲームの無線のような声を上げてしまつたがその後。

屋敷の入口付近から大きな音によつて打ち消された

何者かが侵入してきたのだ。

身を隠すものは部屋になにもないのでフオウを抱えて部屋の片隅に退避する。

(うわーい、まるでホラー映画見たいだぞうー……怖ツ！)

「うう」とする。

ギシギシと足音が響く音が自分の方に近づいてくるのがわかつた。

ダンボール箱かステルス迷彩が欲しいよー！

！）

気分は蛇の名前を持つ潜入工作員が見つかってアラートが消えるのを待つソレである。

ゲームや映画で見ると実際に経験するのとでは怖さが段違いである。

「こんな経験は正直したくなかったよーひーん！」と立香は嘆いた。

足音はすぐそこまで迫っていた。

危

そして足音が止まつた瞬間に嫌な予感がして全力でその場から離れる。

野生の本能とか直感とかそういうのが全力でわたしに逃げろと言っている！

ゴツ!!

轟音と共に障子が破壊された。

自分のすぐ上を飛んでいった障子の枠に肝を冷やす。

恐怖を噛み殺してフォウを抱えて脇目もふらずに先程まで障子があつた場所に向かつて全力で走る。

今まで居た部屋は縁側なので眼の前にはすぐ庭がある。

うまく行けば障子を破壊した相手がこちらを視認する前に逃げることも可能——。（嘘、もう一体？）

敵性存在をやりすごしたと思つたら新しい敵性存在がいた。

後ろにいる個体に比べると小柄だが自分を殺すには十分すぎる相手だと分かつた。いつか動物園で見た腹を減らした時のライオンなんて目じやない威圧感を感じる。

「は、はあい調子いい？　あ、あいむゆあーー！」

息を止めた直後に全力疾走したせいで一瞬酸欠で頭が真っ白になつたがすぐに大きく深呼吸をして友好的な挨拶をしてみた。

返答は無言の攻撃であつた。

（あ、ダメだこれ）

觸體の仮面をつけた怪人の蹴りが迫るのをスローモーションで感じた。

これが噂の走馬灯が流れる前兆というやつかと冷静にどこか他人事のように感じる自分がいる。

視線の端で何かがわずかに銀色の光が煌めいた気がした。

そして黒い足が自分に当たる直前で攻撃が弾かれた。

「走つて」

決して大きい声ではないがよく通るとしても綺麗な声が聞こえた。

その声に命ぜられるまま周囲を咄嗟に見渡して土蔵を見つけてそこに向かつて走つた。

バタンと大きな音をたてて扉を開き、そして素早く振り返って閉めた。

咄嗟に門を見つけてかける。

ハアハアと暗がりの中で自分の呼吸音が響いた。

連續で全力行動をしたせいで息が荒い。

フォウくんが自分の腕から離れて心配そうにこちらを見ている。

(……全力で逃げてきたけど、これ、居場所バレバレで逃げ場がないよね?)

ふらふらと扉を離れて反対側の壁によりかかりながら呼吸を整えて気づく。
ガツ!! ゴツ!!

その考えを肯定するように扉を思いつきり殴りつけるような音が響いた。
一撃ごとに門が曲がっていくのが目に見えて分かつた。

ドガツ!!

強烈な一撃が門ごと壊れた扉が飛んできた。

部屋の片隅に逃げていたことで難を逃れたがこちらを見つめる怪人二体。
逃げ場もなく、状況を改善するような一発逆転のアイデイアは何もない。
もはや乾いた笑いしか出ない。

「これはもうだめかもわからんね」

「ふおーう…」

立香は体格が大きい方の怪人が拳を振りかぶったのを見て。腕に抱えているフオウを庇うべく背を向けて体を固くした。ゴツ!!

大きな打撃音が響いたが予想していた衝撃が一切こないことを疑問に思い目を開いた。

眼の前に居たのは――

「マスター、よかつた間に合いました。 サーヴァント、マシユ・キリエライトこれより

――

「マシユ！ 何故マシユがここに!? 怪我は？ 生きてたのか、自力で治療を？ マ

シユ！ うふッ」

「(無言の顔パン) ふお、ふおうふおー (訳: 落ち着け、決め台詞を邪魔するな)」

カルデアで知り合つた少女マシユ・キリエライトであつた。

^{サバゲント}爆発により死にかけていた彼女は再開したい今、大きな盾で攻撃を防ぎ、立香を護る英靈を自称していた。

壊れた土蔵の隙間から降り注ぐ月の光に照らされる彼女はまるで物語の英雄のようだつた。

3、

「僕だけ置いてくの酷くない？　いや、いいけどね」

屋根の上に立ついつわは飛び上がって遠くに移動する立香とマシユの姿をぼけーっと見送った。

アサシンらしきサーヴァントの攻撃から立香を糸を使って護つたのは彼である。

立香が土蔵に逃げた隙に戦闘態勢を整えていたら勢いよくこの武家屋敷に駆けつけたマシユに気づいた。

サーヴァント特有の直感から立香の大まかな位置を把握していたマシユは大きな音がする方向へ移動して土蔵の中に居る立香を見つけた。

新手の存在を迎撃しようとする敵性存在^{エネミー}二体をいつわは糸を使い捌き。

二人が合流するのをサポートしていたのだがマシユはそのまま立香とフオウを抱えて飛び上がり急速に場から離脱していく。

多分いつわが居たのに二人共気付いていないのだろう。

爆発事故に巻き込まれた人員の応急処置を終えたカルデアスタッフは秋いつわを特異点F。

つまり西暦2004年の冬木に送り込んだ。

特異点の解決と強制的に靈子^{レイシット}転移に巻き込まれた藤丸立香とマシユ・キリエライトを

救出ためだ。

レイシフト適正と戦闘力はAチームでも随一ではあるが前所長の肝いりかつ魔術師としては素人の彼に対する現在の所長との仲の悪さは有名なのでAチームメンバーでありながらボイコットしてたことも緊急時故に不幸中の幸いとして唯一の無事なマスターとしてお咎め無しである。

オルガマリーへの対応も素顔でいればどうとでもなつたのだが顔を隠してカルデアで過ごす日々をおくつた甲斐があつて当初の目標であつた爆弾回避に成功である。

もつともここからが長いのだが……。

『いつわ君、聞こえるか！ 先程立香君との連絡が途絶えた!!』

「はいはい聞こえますよー、彼女は変な格好をしているキリエライト嬢が抱えて安全地帯へと離脱したよ」

『マシユが!? 一体全体どういうことなんだい!?』

いつわは飛んできたダークを糸で弾き飛ばす。

こちらに気付いたアサシンのサーヴアントによる攻撃である。

「悪いけど立香嬢を狙っていた敵性存在がこちらに気づいて攻撃を仕掛けてきたので一旦切るよ。

——さて、しようがないレオナルド・ダ・ヴィンチ作の糸と身につけた技がサーヴア

ントに通用するか試してみるか。……ダメなら逃げよう」

そう言って指を折り曲げて糸を放ち、ついわは戦闘を開始した。

新・悪性隔絶魔界都市＜新宿＞—序章—（III）

「それじゃあシミュレーションを開始するよ」

「はーい」

現在いつわはカルデアで初めて戦闘訓練を行うべくシミュレーター室に居た。シミュレーターを稼働させるカルデアのスタッフ達は皆サングラスやバイザーなどをつけていた。

そうでないと網膜にその美貌が焼き付いて脳内麻薬の成分と化したように記憶野の一部に運ばれ、長い間、もしかしたら一生離れてはくれないのだ。

「おー、実体化した」

目の前に現れたゴーレムにいつわは感嘆の声をあげた。

普通の人間なら攻撃が当たつたら一発で昇天しかねない質量のゴーレムをみながら本人は『リアルソリッドビジョンだ、後でデュエルが出来ないか聞いてみよう』と呑気な事を考えていた。

・・・

「大丈夫なんですかあの子？」

「本人は大丈夫だと言っている」

カルデアの職員がすぐ側の同僚に尋ねた。

この世の住人とは思えない程の玲瓏な顔を持つ少年のことである。

一目で尋常じやない人物だとわかるが魔術師ではないと聞く。

いくらシミュレーションとはいえサーヴァントなし。

しかも相手は立ち回り次第でサーヴァントすら不覚を取りかねないゴーレムだ。

普通に考えると逃げることがせいぜいで倒すことなど出来ないはずだが？

シユミレーションが開始していつわにゴーレムが襲いかかる。

それに対しても「わー、すごーい、たーのしー！」と棒読みしながら棒立ちしたままであつた。

他の職員が本当に大丈夫なのかと眉をしかめた時にそれは起きた。

殴りかかろうとするゴーレムが腕を振りかぶった次の瞬間にその腕が後方に吹き飛んだ。

ゴーレムに対して起きた奇妙な現象に職員たちは目を開いた。
機材の方を見ると一切の魔術反応は感知されていない

「おー、すごい、下手したら反応しないかもしねーと思つたけどちゃんと出来てる」

それを成したであらう魔貌の持ち主はいつさいその場から動いておらず何かをした
ようには見えない。

いつわは動物学者が希少動物の行動を観察するようにゴーレムを興味深そうに見つ
めていた。

これが生物であるならその得体の知れない攻撃に慄き逃げ出す準備をしたかもしれ
ないが

命ぜられるまま行動するしかできない哀れなゴーレムはそのまま逆の手で殴りかか
ろうとして、身体を十字に薄紙にハサミを入れたかのように簡単に裂け崩れ落ちた。

職員達からするといつわがただ棒立ちしているだけでゴーレムが自壊したようにし
た見えない。

その姿を見て職員は「美」という漢字の由来を思い出した。

丸々と肥えた大きな羊を神への供物にした姿だという説がある。

羊を頭から真っ直ぐ真っ二つに割いて広げた状態にするらしい、それを表わしている
字なのだと。

ゴーレムの姿はさながら現世に降り立った神に対して生贊に捧げられた供物にも見

えた。

いつわはシミュレーションが終了したのを確認するとそのままスタッタと部屋から出て行き職員達に声をかけている。

魔術師でなくともカルデアの一員として認めることに否を唱えるものはすでにいなくなつた。

しかし、いつわの背中を見て職員は思つた。

醜悪な怪物らしい怪物などと違ひ危険な存在とわかつていても目の話すことの出来ない魂さえも虜にしてしまう、とてもとても綺麗で。

——残酷な、あの姿。

あの少年は凡庸な自分のような人間などでは理解できないぐらいの怪物なのではないのか？、と。

(シミュレーターでどうやつて遊ぼうかなー！)

いや、待て私的利用だと文句言われそうだな説得する上手い手段は……)

秋いつわは顔と技量に似合わず内面はライトなオタクであることをカルデアの職員は知るはずもなかつた。

これはカルデアでジャパニーズサブカルチャーが流行る前の話。

流行った後にシミュレーターを最も使用したのはいつわであるのは余談である。

1、

秋いつわが使う武器は特殊鋼で作られた太さ1000分の1ミクロン、ナノサイズだ。

風にそよぎ、軽さはほとんど感じられず、存在していることすら認識できないような糸である。

だが秋いつわの神業ともいえる指さばきによりチタン合金でさえ斬断し、数ミリから数キロを移動してのける。

血を這い、壁を伝い、密閉された大金庫の隙間から忍び込み、接触した相手の情報を伝え、緊縛した者を激痛地獄に落とし、死者さえも操り人形として自在に操作するのだ。『筋骨隆々で拳を武器にすることからおそらく一体は『怪腕のゴズール』、うーん、もう一体は誰だろ？』

立香とマシユが戦場から離脱したことにより戦闘に突入したいつわとサーヴァント。

少々曖昧な記憶だと特異点Fの冬木で行われた聖杯戦争のアサシンクラスは『呪腕』のハサンだった気がするが複数の個体を使役するとなると『百の貌』のハサン、あるいは

は『百貌』のハサンであると推測される。

自分という異物が居るのでこの程度の差異はいつわの想定内に収まっている。

いつわの眼の前に拳ダコが見えるぐらいの距離まで拳が迫る。

その拳がいつわの命へと届いたと相手が認識した刹那、いつわの体が糸で引っ張られる移動する。

すぐ横を通り過ぎる巨漢を切り裂かんと指に意識を向けると冷たい感触が頭に向けられているのを感じ、意識を攻撃から防御へと切り替える。

するとすかさずこちらの頭部をめがけて弾丸もかくやという速度で短剣が飛んでくるのを妖糸を使い弾く。

その巨体に見合つた人体を容易くしうる破壊力を持つ巨漢とその陰に隠れながらこちらが攻撃を回避するタイミングで生まれる隙を狙い短剣を投げる瘦せっぽち。

(デカイ方の攻撃を食らう気は全くしないけど回避して反撃に移る前にしてくる牽制の投げナイフで、こちらの攻撃をする『機』を与えないコンビネーション、相手の立ち回りが上手くて嫌になるね)

秋いつわは魔術師ではない、魔術の才覚はあるらしいが本人に命をチップに根源に辿り着くという野心もないでの最低限の暗示や人払いだけは学んでいるが正直素人に毛

が生えた程度である。

魔術師としての実力はカルデアの中でもダントツの最下位である。

だが山奥に存在する退魔の血を引く特殊な技術を継承する一族の出であり、その中でも歴史に残る天才と称された天賦の才は圧倒的でカルデアのエリート中のエリートたちが集められたAチームに所属するに足る実力であつた。

その戦闘能力は三騎士に劣るとはいへ対人戦闘に特化したマスター殺しのクラスのアサシンと二体一で妖糸のみで渡り合うその神業、否、魔技とよぶべき恐るべき技量であつた。

——しかし。

（せんせんあたんなーい）

微細に指を動かし見えざる刃を縦横に振るうが滑るような動きでアサシン達は避けた。

いつわ隙をうかがい何度か訪れたチャンスに反撃を試みるが躊躇している。
暗殺手段に似たような技術があるのか？

視線や攻撃時の殺氣や呼吸から読んでいるのか？

対人特化のアサシンクラスといつわの戦闘手段が噛み合いすぎているのか？
本来なら攻撃手段もわからない筈の妖糸の攻撃を何故か避けられていた。

(やつぱりサーヴァントを倒すにはちと使える技の数が足りないなー経験不足、レベルが足りない！)

先祖返りをした混血、先祖代々の独自の術を使う術者などを相手にしてきたいつわだが生まれ持った天賦の才と類まれ糸を使った戦闘方法により同じ技を使う同輩以外で苦戦した経験がまつたくないため本人の想定以上に苦戦を強いられていた。

現在のいつわでは攻撃と防御を同時にこなす技が使えないため否応なしに長期戦を強いられていた。

このままでは自分の技術が通用しない事実に焦ってしまい調子が崩れ緊張と疲労の果てにその命を奪われてしまうだろう。

『普通』なら。

(相手は短剣を生み出すんじやなくて使い回すタイプだから、その内弾切れするだろう、避け続けてれば反撃のチャンスがくるだろうからじっくり行こうかな)

秋いつわの戦闘スタイルは針に糸を通すなどという次元では語れない精緻にして精妙な技であらゆる事態に対処する妖糸、そしていかなる時も自身のペースを崩さない図太さである。

人間の命など容易く奪うサーヴァントを相手にしてもまつたく揺るがない精神性こ

そが秋いつわの強みである。

そして秋いつわの最大の長所は……。

バキイーン!!

まともに食らつたら人体など柘榴のように爆ぜるであろう巨漢の鉄拳を普段どおりの顔で避け。

——ようとして顔に着けていたバイザーが破壊された。

思考の海を漂っていたためバイザーを着用しての戦闘であつたのを忘れていたのだ。一瞬足を止めてその生まれた隙を突くようにいつわに投げられた短刀を妖糸で捌く。そしてアサシンの二人は『見て』しまつた、秋いつわの顔を。

カルデアのサーヴァント第三号にして技術局特別名譽顧問にして技術開発部部長である人類史上最高峰の天才、『レオナルド・ダ・ヴィンチ』が自分の作ったどんな作品、それこそ自分の代名詞である『モナ・リザ』さえ、その美しさには遙かに及ばないと歎嘆みする隔絶した美。「単純な美では及ばなくても私の『モナ・リザ』は至高の芸術品なのは搖るがぬ事実だからね別に悔しくないさ、それはさておきいつわくんちょっと絵のモデルに……え、ダメ?」 b y ダヴィンチちゃん

たとえどんな苛烈な生を送り、死後も英靈として使役され幾万年の月日を得たとして

も。

絶対にその美しさだけは忘れることがないと言い切れる美の結晶がここにあった。見よ！ その顔を見てしまったアサシン一人がありえない美を目にしたために動きを止めている。

聖杯に汚染され思考が濁っているが暗殺のプロフェッショナルであるアサシンすらその使命を忘れてしまうのだ。

その美を目撃した対価とでもいわんばかりに若き死神は二体のサーヴァントの首を刈り取つた。

秋いつわ、その美しさ、技倆、正に魔人と呼ぶに一切の不足なし。

『バイザーがなければ即死だつた』、……うーん、いや、『顔の差かな』の方か？』
サーヴァントを倒した直後に言う決め台詞を迷つていた。

実力や風貌はともかく人格の方は魔人と呼ぶには程遠いのが秋いつわである。

2、

「聖杯戦争、ですか？」

「そうよ、この街の破壊は災害でなく人為的なもの。 となれば聖杯戦争が原因と考えるのが妥当だわ」

「say hi 戦争？ なんだか馴れ馴れしいテンションの戦争ですね」

「うん、貴女はちょっと黙つてなさい。簡単にいうとあらゆる願いが叶う『聖杯』を巡つての殺し合いのこと、実はこの冬木では2004年に行われたという記録が確認されている」

「ああ、その通りここ冬木で聖杯戦争は行われていた。もつともオレ達の聖杯戦争は途中で狂つちまつたけどな」

謎の衣装に身を包んだマシユに抱えられたまま死地から脱出した立香は逃げ回つている所長であるオルガマリー・アニムスファイアを発見、そのままマシユが敵を撃破して救出、そして立香とマシユは冬木の事態についての考察を聞いていた所を鎌を持った女性のサーヴァントに襲われ絶体絶命のときにキヤスターのサーヴァントと名乗る人物に助けられていた。

「ある夜を境に街は炎に包まれ人間は消え、サーヴァントだけが残りオレ以外はみんなやられちまつた」

「え、それっておかしくない？ ドクロの仮面をしたサーヴァントや先ほどの鎌を持ったサーヴァントがいたけど」

「妙な話でな、セイバーに倒された連中は奴の手先になつた。つまりだ、セイバーを倒さなきやこの聖杯戦争は終わらないってことだ」

話を聞くところによるところによるとこの青いローブを纏つたケルトの魔術を使うサーヴァントはケルト神話の大英雄であるクー・フーリンがキャスタークラスで呼ばれた存在らしい。

「槍があればなあ」「獲物がコレ（杖）じゃなくてゲイボルグなら問題なく一人で片付いたんだけどなー」と本人はランサークラスに未練たらたらであつた。

「へー、なるほど、よくわからんがボスを倒さなきゃゲームはクリアできないと」「貴女なんでそんな理解力でカルデアいるのよ？」

「回しますか……じゃない、海外での仕事に興味がありますかYES or NOのアンケートでYESに○をして気がついたらカルデアに」「ええ……、なにそれ」

「まずいですよ所長、訴えられたら100%負けます！」

「そ、そんな部下の暴走のせいでカルデアの名誉に傷が！ 助けてレフ!?」「いや、別に訴えませんけどね。でも……そのためにはわかるでしょ？」

そう言つた立香は「うへへ、これで天井まで回せる」と人類悪顕現とテロップが出そ
うな乙女がしてはいけない顔をしていた。

ちなみにガチャは自腹派なのでお金を要求しているのではなくカルデアに入館した
際に機密情報の保持のため外部と連絡を取れないようとりあげられた携帯を返せと

言つてゐる模様。

そこにいつわから連絡を切られたために立香の方へと回線を繋げて見ていたロマニが会話に加わる。

『悪いけど立香くん、今は外の世界が滅んでるからソーシャルゲームはできないよ』
「え」。……わたしは生きる意味をなくしたo·r·z』

『そこまで!? 生き残るために頑張るつていってたじやないか君ツ!』
『ガチャが出来ないならもうゴールしてもいいよね……』

『いやダメだよ! 謹めたら試合終了だよ!』

F Xを溶かした人並みにテンションがガタ落ちして地べたに這いつくばる立香にマシユはおろおろして、所長は呆れ、ロマニは励まし続け、キヤスターは「このお嬢ちゃん出るどこ出てるけどまだまだガキだな」とこつそり思つていた。

『……思つてたんだけどドクター本当に日本のサブカル詳しいね』

『いつわくんがカルデアで色々流行らせたからねー、所長とか一部の人間以外は結構詳しいよ』

「ほうほう」

『残つてるスタッフは特にハマつてゐる連中だ』

『そつかー、熱い浪漫について語り合うためには戦つて生き残らなければいけないの

かー』

『そ、そ、そ、う、だ、か、ら、頑、張、つ、て、よ』

「し、ょ、う、が、な、い、に、や、一、ガ、チ、ヤ、を、引、く、た、め、に、頑、張、る、ゾ、イ、!」

「立、ち、直、つ、て、く、れ、た、の、は、い、い、け、ど、なん、で、そ、こ、ま、で、ガ、チ、ヤ、に、情、熱、を、燃、や、せ、る、か、わ、か、ら、な、い、」

「ド、ク、タ、ー、の、ド、ル、オ、タ、趣、味、と、似、た、よ、う、な、も、の、」

『い、や、マ、ギ、☆、マ、リ、と、一、緒、に、し、な、い、で、く、れ、(キ、ツ、パ、リ)、』

完全に立ち直った立香はドクターとオタ趣味談義で大盛り上がりをし、その姿をオルガマリーは冷めた目で見ていた。

「ガ、チ、ヤ、で、得、ら、れ、る、射、幸、心、こ、そ、人、間、の、求、め、る、幸、福、の、形、だ、と、い、う、こ、と、を、理、解、す、る、ん、だ、よ、ド、ク、タ、ー、!」

『エ、ゴ、だ、よ、そ、れ、は、!　ガ、チ、ヤ、は、人、間、全、て、の、欲、を、飲、み、干、せ、た、り、し、な、い、!』

「人、間、の、知、恵、は、そ、ん、な、こ、と、だ、つ、て、乗、り、越、え、ら、れ、る、!　マ、ギ、☆、マ、リ、に、ガ、チ、ヤ、引、か、せ、た、り、す、れ、ば、萌、え、る、で、し、ょ、!」

『な、ん、…、だ、と、…、そ、の、発、想、は、な、か、つ、た、…、…、』

「…、…、な、に、こ、の、茶、番、」

「よ、く、わ、か、り、ま、せ、ん、が、先、輩、が、元、氣、に、な、つ、た、か、ら、よ、い、こ、と、な、の、で、は、ない、で、し、ょ、う、か、?」

「盛り上がりがつてゐるところ悪いんだけどよ、そろそろ移動しようや嬢ちゃん達」

そう言つて杖で肩をポンポン叩きながら行動を促してゐたキヤスターが視線を急に空に向けた。

「どうしたの？」

「……新手、いや違うな、ありや嬢ちゃんたちの知り合いか？」

「はい？」

そう言われて空を見るが何も見えない、いや、銀色の鎧を纏つた人影とバサバサと服をたなびかせる黒い鳥のようなものが見えた。

『んん？　あれは…そうだいつわくんだ！　けどこの反応、なんでサーヴァントと一緒にいるんだ!?』

3、

少々時間は遡る。

アサシン達を倒すことに成功したいつわは先程の戦闘で破壊された土蔵跡に立つていた。

感慨深そうに土蔵の内部を見渡すと瓦礫の下にある床にうつすらと魔方陣が存在するのを発見する。

「これがStay nightの名シーンが行われた場所だな！」

型月作品ファンとして、心境は聖地巡礼する信徒のそれである。

テンションが高まり溢れ出した結果、立香達と合流することも忘れている。
そしてこともあろうに名場面を再現するために呪文の詠唱を始めだした。

「告げる汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い この意 この理に従うならば応えよ、誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者。

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言靈を纏う七天。

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

言つてやつたぜとでもいわんばかりに暗記した呪文の詠唱をしたいつわは満足気な顔をした。

じやあそろそろ立香達と合流するかと目を開け足を翻そうとすると魔法陣が発光していることに気付いた。

「……え？ うそーん、マジ!？」

体から急速に力が抜けていく、魔法陣に魔力が吸収されているのだ。

そして魔法陣に光が集まり眩い光が視界を包んでいき、いつわは手で光を遮り目をつぶる。

光が收まり目を開くと魔法陣の上には凛とした空気を纏つた、金髪の髪を後ろで結い上げ、青と銀の甲冑を着た見目麗しい少女がそこに居た。

「問おう。 貴方が私のマスターか」

その少女は、宝石のような目でこちらをみると凛とした声で、そう言つた。

その日、運命に出会う。

小ネタ もしも屍山血河舞台下総国にあの人があたら

「私もまだまだ修行不足だ……」

勝負有り！

勝者アーチャー・インフェルノ 巴 御前！

「うわああああああ!! 武藏ちゃんがやられたあああああああ!!」

「アーチャー相手だとセイバーの武藏ちゃん不利だから最初にオーダーチェンジで控えのランサーと交代すればよかつたのに」

「どこに控えいるんだよオ!? ヤバイヤバイ超ヤバイ! マジヤバイ!!」

「イベント戦なんだから武藏ちゃんも反転トリスタンみたいに相性不利なしの等倍だつたらいいのにそういうのないからなあ……」

先程まで行われた死闘に固唾を飲んで見守っていたが武藏が敗北したことにより絶叫する立香。

そしてゲームメタな発言をするいつわ。(※これはゲームではないので仲間サーヴァントはいません)

「うわあああ！ どうするのどうするのどうするの?!?」

「動搖しそぎイ！ どうするのもなにも糸で斬つても死はないから武藏ちゃんに任せるしかない。」

戦闘不能だけど幸いにもまだ武藏ちゃんは息がある。
魔界都市〈新宿〉で鍛えたから腕は大分あがつてるので僕でも時間稼ぎぐらいはできるから武藏ちゃんを連れて逃げ……」

次の獲物としてこちらに狙いを定めるアーチャーインフェル。
立香を護るため前に立ちふさがろうとしたいつわ。

両名ともに一瞬で『何か』の気配に気付きバツと視線を向ける
そして立香も強烈な気配を感じて二人が向いて方向を遅れて見る。

「武藏もなかなかに強い、が、我が『鬼哭隊』の魔剣士になるにはまだ未熟」

「何者!?」

「え、貴方は……!?」

孝靈天皇皇子こうれいてんのうおうじ
吉備津彦命きびつひこのみこと

「飛鳥時代の温羅討伐の軍神、桃太郎卿!?」

「え、新手のサーヴァント!?」

「いや、……違う生身だ、英靈じやない」

「麻呂は時代ときの支配者からまつろわぬ民を肅清する使命を行う代わりに置き血により不

老長寿を得ておる、現在は徳川に与くみしておるゆえ江戸幕府に仇なす逆賊を討ちに参つた」

あまりの存在感に超常の武とそれを得るために鍛えに鍛えた独自の超感覚を持つアーチャーインフェルノといつわは動けない。

目の前にいる存在はカルデアのサーヴァントに鍛えられて最低限の護身術を身につけた程度の立香でさえわかるあまりにも常軌を逸した武と肉体の持ち主であつた。

桃太郎卿は懐から袋を出し、そこから何かを取り出してアーチャーインフェルノの前に差し出した。

「来やれ、腹が減つたろう。 麻呂の団子は格別の醍醐味。 嗅ぐもよし、塗るもよし」

「オホーイ！ たまらない！ むしろこの立香が食べててしまいたい！」

（糸で調べたけどアレ重度の麻薬が入つて食べたら最後、桃太郎卿の意のままになつてしまふというのは言わないほうがいいんだろうなあ……）

返答は業火だつた。

その憎悪を具現するインフェルノの名に相応しき猛火が桃太郎卿に襲いかかる。

桃太郎卿は炎に包まれるが腕を振るうと炎はその風圧により一瞬で消え去る。

「桃太郎卿！」

「石で出来た狩衣かりぎぬゆえ燃えぬ」

「お尊顔は生身かお…」

「炎も肺に入れなければ安泰じや」

アーチャーインフェルノの大きな薙刀に炎が宿り桃太郎卿を切り裂かんとその刃を構えた。

「業火ほのおの刃やいば！ 鬼め！ 地獄の番犬氣取りか！」

「このお爺さん桃太郎卿の連れ？」

「さあ？」

「おお！ 神州無敵の玉劍ぎょくけん！ いよいよ抜き払い給たまうぞ！」

「一目で凄く強いというのはわかるけど不死身の相手を倒しきれるの？」

「桃太郎卿に是非を問うな、不死身の相手を倒すことは桃太郎卿なら出来る、出来るのだ

！」

「ア、ハイ」

英靈剣豪改め魔剣豪 五番勝負

吉備津彦命 神州無敵 桃太郎卿

VS

アーチャー・インフェルノ 一切焼却

巴 御前！

いざ 尋常に
勝負!!

「三厳よ、父は今神話を目の当たりにしておる!」

「三厳……もしかして柳生三厳（通称・柳生十兵衛）のこと？　だとしたらこの人は……」
「な、笛とな!?」

「よくわからんけどこの人、桃太郎卿のこと好きすぎじゃない？」

「おほ！　あれがかの桃太郎卿の三つの下僕！」

「エンジヨイしすぎだろこの人」

「……そろそろ誰か私の傷の手当して欲しいんだけど」

『もしも屍山血河舞台下総国に桃太郎卿が来たら』

悪性隔絶魔界都市〈新宿〉——幕間—— とある夢での出会い

い

「つきが、きれいだ……ってなんだ夢か」

暗闇の中を誰かに抱えられた夢を見ていた立香が目を開くと白い見慣れぬ天井がそこにあつた。

天井はまるでラクガキされたように黒い線だらけでその黒い線に触れたらいきなり線をなぞるようにモノがばらばらになる……なんてことはまったくない普通の天井だつた。

「知らない天井だ！」

ろくな大人がいない環境で鬱になつてしまつた汎用人型決戦兵器の第二パイロットの名言が口から情熱と愛と共に逆り溢れ出した。

いつかは言つてみたい台詞ランкиングのナンバー7を言えた満足感に暫し浸り正気に返ると左右をキヨロキヨロと見回した。

「あー、そつかここはカルデアか」

ドクターロマニといつわの二人と話をした部屋と一緒に取りだつた。

違いといえば部屋に漫画やDVDやブルーレイディスク、ゲーム機がないということだけである。

腕を上げてみると白い袖口から支給された制服だと分かつた。

「んんんん??」

先程から聞き覚えのない低い声が部屋に響いて違和感を感じて下を見ると黒いズボンを穿いているのが見えた。

あれ、ズボンなんか穿いてたつけ?

……いやおかしいなんでそもそも真下を向いたのに胸に邪魔されないでズボンが見えるんだ!?

「え、嘘! 胸がなくなってる!」

手で胸をペタペタ触るとそれなりに豊かな膨らみがなくなっていた。
かわりに硬い筋肉の感触が伝わった。

「まさかまさかまさか!?

股間を触ると本来なにもなかつた場所に柔らかい感触があつた。

部屋に置いてあつた姿見をみると黒髪の少年がこちらを驚いた顔で見返している

「お、男になつてるうう!」

「先輩どうしました!?」

そういって部屋に白衣を纏つて眼鏡をかけている銀髪の少女、マシュー・キリエライトが駆け込んで来た。

「大変だよマシュー！　中国の呪われた泉に入った記憶もなく水も被つてないのに変身しているこれは新手のスタンド攻撃かもしれない！」

「ええーと、泉？　スタンド…？　すいませんよくわからないです、それで先輩いつたい何があつたんですか…？」

「つまり男になってる！」

「はい？　もともと先輩は男性では？」

「なん…だと…？」

マシューは対人経験が少なそうではあるがさすがに男と勘違いされると立香はショックを受けた、ちゃんと胸もあつたしけつこう可愛いほうだとちょっぴり……うん、ちょっとだけ自惚れていたのにあんまりだ。

「うううううあんまりだ：H E E E E Y Y Y Y あ ア ア ア ア

ん ま り だ ア ア ア ア

A H Y Y Y A H Y Y Y A H Y W H O O O O O O O H H H H H H H H H H !!

「ええ!?　先輩今度はいきなり泣きだして本当にどうしたんです!？」

「フー スッとしたぜ！ 激昂してトチ狂いそうになると 泣きわめいて頭を冷静にするといいと焰柱の男の人があつてた」

「ええ……」

「とにかく起きたら自分の認識だと女だつたのに男になつてゐるんだよ、そちらの認識だと最初から男なのマシユ？」

「え、ええ、失礼かもしぬないです先輩の容姿は中性的ではありませんし出会つたときから男性だと……」

「うーん？ どういうことだろ、……そもそもわたしは冬木という街に居た氣がするんだけど」

「冬木ですか？ 最初にレイシフトした」

「そうそう、それでマシユに助けられて……あれ？ そのあとが思い出せない」

冬木に転移して武家屋敷で遺書書いて襲われてマシユに助けられて……誰かにあつたようなそれは誰だつけ？

思い出そうとしたらなんだか顔が熱くなつてきた……知恵熱かな？

「先輩、たいへんです顔が真つ赤になつてます！ もしかしたら疲労で熱が出たせいと混乱しているのです！ ドクターに一度見てもらいましよう！」

そう言つてマシユはサーヴァント形態に変身してお姫様抱っこで立香を運んで駆け

出した。

立香は冬木でもこんな感じだつたなーと思いふけりながら医務室まで運ばれ廊下で
すれ違うカルデアスタッフの視線から現実逃避した。

「ふむ、失敬」

そういうつて指を立香に近づけるとそのまま指が水面の如く顔に沈んでいった、あまり
にも常軌を逸した光景であるがそれをみるマシユは立香を心配そうな顔で見守るだけ
であつた。

慣れているのだこの男の起こす奇怪な現象を見るに。

そして知つているのだ彼にとつて治せない症状は死からの蘇生だけだと。

カルデアの職員全員が彼に抱く感情、それは信者が信奉する神に対しての畏怖に似て
いた。

もつとも名前からして彼は神ではなく悪魔に近いのだが。

「——なるほど、把握した」

そう言つて指を引き抜く。

指を抜かれた立香は指を入れる前と何も変わらない様子であつた。

つまりあまりにも美しすぎるモノを見てしまった衝撃で固まつたままということである。

「話せるかね？」

「あ……はい……」

「君の状況はレイシフトによる後遺症のようなものだ。一時的な存在の搖ぎと意識が薄れたことによつて起きた平行世界への意識だけの転移だ、夢のようなものと捉えて構わんよ」

「はあ……」

「治療は施した。あとは目を閉じ再び目を開けば元の場所に戻る、夢から覚めたまえ」
さながら高名な数学者が学生のやつてている宿題を気まぐれで解いたような何の感慨もない声で治療は終わつたと告げる。

元に戻れるという喜びの気持ちよりも立香の胸に残るのは一つの疑問であつた。

秋いつわすら上回る美貌の持ち主である白い男性は誰だろう？

秋いつわが天使の美貌だとするとこの眼の前の人物は神の美貌だ。
どこか親しみを感じさせ心に生涯焼き付くようないつわの美貌に対して目の前の人
物は美しさに崇敬の気持ちしかわかない。

どちらも極まつた美だが目の前の人物は正に超越者であると感じた。

「あの……、あなたはいったい何者ですか？」

カルデアでドクターと呼ばれる人物はロマニ・アーキマンではなかつたか？

その問い合わせして彼は答えた。

「——名乗つていなかつたな、私は医者だ名をメフィストという」

その名乗りを聞いたとたんに立香の意識は闇に落ちていつた。

2、

「先輩。起きてください、先輩。……起きません。ここは正式な敬称で呼びかけるべきでしようか……。」

「つきが、きれい——だ——」

「なんだか聞き覚えがあるフレーズ」

「ああもう、なにやつているの！　いい加減正気に戻りなさい！」

『いつわ君、いつわ君、顔！　顔隠して！　立香君には初めて見る君の顔は刺激が強すぎる！』

立香は顔を真赤にしてぶつぶつとなにやら呟いている。

マシユは正気に戻らない立香にどんな言葉をかければいいのか試行錯誤を繰り返し。思い通りに物事が上手くいかないことにオルガマリーは喚き散らし。

ロマニは立香がこうなつた原因の人物に注意を促し続け。

原因の人物であるいつわは立香の独り言が夏目漱石の『I Love you』を日本語に翻訳するなら『月が綺麗ですね』と遠まわしな表現にしたほうが言つたというエピソードか、月姫の冒頭の台詞のどつちだろと思案していた。

「……しかしたまげた、あんな色男みたことないぜ同郷の後輩に『輝く貌』と呼ばれるやつが居るがここまでじやないだろうよ」

『輝く貌』……、デイルムツド・オディナですか懐かしい名前です

「おつ、どつかで会つてたかセイバー？」

「ええ、貴方と同じように聖杯戦争で。ランサーのサーヴァントとして召喚された彼と剣を交えたことがあります」

「ランサーか、じゃあオレとは聖杯戦争で顔を合せる可能性は低そうだ」

サーヴァント一人は遠巻きながらその様子をみて談笑している。

一体何故この様な状況になつたのか？

「問おう。 貴方が私のマスターか」

そう問い合わせる少女騎士の頬が染まり動きが止まる。

宝石はその絢爛さ希少性により価値が決まるという、地中で気が遠くなるような年月によつて発生し様々な道具や熱意によつて採掘し類まれな技術により研磨された石は物によつては常人では一生手が届かない程の価値が付与される。

しかし宝石のその希少性と美しさすら彼を見たら道端の石に感じさせる美、神はどれほどの年月と情熱と技術と熱意が注げて作り上げたのかと問いたくなるであろう顔。

その美しさを何かと比べるという相対的な評価は対象を貶めるだけの無意味な行為であると断言できる絶対的な美しさの持ち主こそが秋いつわである。

先程のアサシンのサーヴァントとの戦闘により顔を隠していたバイザーが壊されたことにより素顔になつたいつわの顔をみてしまつたものは同じ様な美しさを持つていな限り誰であろうとこうなるのである。

それをなした万物を魅了する美貌の少年はどう?

(しまつた、なんか光つてたときに尻もちついた体勢にするべきだつたりテイク希望!)
そんなことを考えていた。

3、

「要約すると敵から藤丸さんを逃がすべく援護してたらなんかおいてけぼりくらつて

残った敵と戦闘になつて倒して、戦力不足を感じてダメモトで召喚してみたらなんか成功した』

「ダメで元々で騎士王呼ぶとか騎士王ゆかりの触媒を体に埋め込まれてでもいるのかい!?

『どうかサーヴァントを倒した?』

「いかにもアサシンという風体の割には突撃と投げナイフ攻撃ばかりだつたしそらくまともな思考をしてなかつたと思うので正気なら厳しかつたね』

Fateシリーズの恒例のサーヴァントとの対面イベントをこなして立香の元へと（空を駆けながら）合流したいつわだつたが、しばし顔を赤らめて惚けただけで済んだセイバー（真名：アルトリア・ペンドラゴン）と違い一般人である立香がいつわの顔を見たことにより完全に意識が飛んでしまつていた。

マシユは久しぶりにいつわの素顔を見て惚けていたがなんとか正気に戻り意識が飛んでいる立香を正気に戻そうとしている、キヤスターはいつわの顔を見て驚いたがそれ以上にいつわのすぐ側に居たセイバーを見て驚いた。場を混乱させた元凶のいつわ本人は登場時に決め台詞を言つたが全員にスルーされたことを残念がつていた。

「それでもサーヴァントとやりあつて魔術を使わずに無傷とは……とんでもないな君は」

「それはどーも」

確かに『化け物には化け物をぶつけるんだよ！』という考えが主流である。
だからこそ『サーヴァントには人間じや勝てねえ、武術を習つていなイサーヴァントでもだ、ならなつちやえればいいじやんサーヴァントに』というデミサーヴァントを作ろうという考えが生まれているのである。

しかし原^{Stay Night}典からすでにサーヴァントを倒せる人間^{だがここに例外が存在する}が何人もいるのを知つていて、
上にキリシュタリアは神靈をやつつけたとかおぼろげに記憶している。

それに比べて危うくやられかけたし大したことでもないといつわは思つていた。

騎士王召喚
「今年の水着ガチャはオツキーしかこなかつたからこれぐらいはね、ガチャ運は収束する！」

「——ボクには君が何を言つてゐるかわからない」

「君は知るだろう、目当てのキャラに容易く辿り着く者とそうでないものとの差は残酷なまでの開きがあるという事実を、存在を求める心は僕らを過酷なガチャへと駆り立てる、降りるということは許されなかつた」

「知りたくないよ!? 唐突なデスポエムはやめてくれ!」

ドルオタにはガーチャーと呼ばれる人種の苦悩はわからないかと視線を同志へと向けるが相変わらず天地乖離す開闢の意識状態（意味不明）な立香をみるとマシユに介抱されている。

「——マスター。マスター、起きてください、起きないと殺しますよ」

「あ ア ア ア ん ま り だ ア ア ア ア」

『これは返事? それとも寝言?』

「というかもしかしてレムレムしてない?』

顔を見ると支障が生ずるということで顔を隠していたがサーヴァントとの戦闘での美貌を遮るものがなくなつたことで、その顔を見てしまつた立香は恍惚に浸つていた。

マシユもオルガマリーも同様にいつわの顔を見て忘我状態だつたが過去に見ていたこともありしようがないのでロマンから支給された対魅^{サングラス}了礼^{ラス}装を装備させてから数分程度で正気に戻つた。

「たかが目隠しがどれた程度でこれとは相変わらず面倒くさい」

・

「先輩大丈夫ですか？」

「だいじょうぶだ、わたしはしようきにもどつた――よくあることです、ここは魔界都市<新宿>です」

『いや冬木町だからね?』

「駄目みたいですね』

(なんで魔界都市なんて地名が? この世界にはあの作品ないはずだけど)

キヤスターがルーン魔術を使ってなんとか会話ができる程度に回復したがこりやあかんということで一時的に学校に避難して夜を明かすことに決めた。

激・悪性隔絶魔界都市〈新宿〉——序章——(IV)

いつわは学校にたどり着くと入り口で背負っていた立香を降ろしてマシユに預けると、朝にラジオ体操をするかのように腕を上げて開いて下ろすことを繰り返した。

「何してるのよ貴方?」

「ちよつとね」

動作を終えたいつわは建物に入ると廊下を勝手知ったるといわんばかりの足取りで教室に移動した。

他のメンバーは訝しげな顔で後を追いかけた勝手な行動に文句がでないのは、この少年の茫洋な美は薄暗い廊下をただ歩くだけでも闇夜に抱擁され光をもたらすような錯覚を見るものの心理に起こすからだ。

「ちよつとここで待つてね」

とセイバーだけ連れて初めて訪れたはずなのに薄暗い学校をまるでこの場所には何があるか把握しているかの様に軽やかにいくつかの部屋を行き来した。

数分後には防災用道具が入つたりユツクや毛布など使えそうな物を集めてだして教室の教壇に置いたあとに毛布を敷いてそこに立香を横たえさせた。

「……長い夢を見ていた、具体的には白い医者に会つた後に太正桜に浪漫の嵐を経験したぐらい」

「白い医師は心当たりがなくもないけど、太正桜？」

「いずれ会う氣がする女王様やくノ一や女剣士に似た声の人と一緒に帝都で戦つていたんだ」

「帝都ですか？」

「帝都で女剣士というと——すぐ吐血する桜なセイバー？」

「なにをいつているんだ、帝都の平和を守れたのは全部神山隊長のおかげじゃないか！」
「誰だよ神山隊長（※劇中はまだ西暦2015年です）」

「フオウ？？（意訳：ねえねえ本当に大丈夫？）

「息ついた所で目を覚まし起きてそうそうよくわからないことを立香が言い出して
いた、明らかに正気を失つている。

「サーヴァント契約の後遺症でただでさえ脳に負荷がかかつっていたのが、どこかの誰か
さんを見て悪化したのね……」

「それは大変だね」

『彼にそういう遠回しの嫌味は通用しないよ』

『（白い医師ってあいつか、夢の中だとしても一目見ればそれはおかしくなるか）

邪神なTRPG風に言うとSAN値が下がりすぎて一時的狂気に陥っているのだ、あまりに美しすぎるものはあまりにも醜すぎるものと同じく人を狂気へと駆り立てるのである。

そんな立香をオルガマリーはぶちぶちと文句をいいながらなんやかんやで世話をしているあたり面倒見はいいらしい。ロマニは精神的に不安定な人間でも自分よりも状態が悪く世話が必要な人間がいると逆に落ち着くものだなーと感心していた。

「キラキラのアーチャー狙いで回したらドレイク船長を引いてしまつたり、ギリシャロボ使い狙つたらマジカルアサシン引いたり、りゅうたん引いて、ラスト一枚で手足が多い中華ロボ引いた気がするけど現実です、鰐出た時点で当たりですけど欲しかったあの二人b.y作者、わたしは正気に戻つた！」

「中華ロボはAチームの芥さんが食いつきそう」

「ダメだね、まだ先があるんだから寝かせてあげて』
「アハハ、大きい…あれは彗星かな。いや、違うな。
もんね。あれは死兆星かな？」

彗星はもつと、バアツて動く

カルデアから支給された鎮静剤をいつわはオルガマリーに渡し押さえ込むが「流行らせコラ!!」と立香は喚きながら暴れたが注射されると「タワバ!!!」と声を上げて眠りに落ちた。

とても女性が言うセリフではないが見て見ぬフリをする情けがこのメンバーにはあつた。

「あの赤い外套のアーチャーがいるのですか……」

「ああ、黒化したお前さんを守つてる。腹立たしいが骨が折れる相手だ」

一方サーヴァント二名は我関せずとこの先にある戦いに備えて情報交換をしていた。

両名共に自分たちの役割である戦闘に集中するべしと英雄として戦争なれしているだけあつて完全に割り切つた効率重視な行動である。

ギヤグ空間に閑わりたくなかつただけかもしれない。

立香を眠らせるとマシユもオルガマリーも状況の激しい変化に精神的にも肉体的にも疲労の色が濃くなつていたこともあり、サーヴァント二騎に夜営を頼み見つけていた毛布を体に巻いて限界だつたのかすぐ眠りに落ちた。

いつわはさすがに女性と同部屋は後々面倒になると思い別の教室に毛布を持つて出て移動してから眠りについた。



「本来は男は男、女は女で護衛した方がいいんだろうけどよ。あの顔じゃフェルグスの叔父貴みたいに男でも手を出してしまいそんなんでな、頼むわ」

「……は？ 何を言つているのですかキャスター！？」

「自分のマスターだし問題ないだろ、仮に襲つてもあの年頃なら女から襲われてもOK出すだろ」

正直寝込みの女と一緒にほうがまだ理性が保てそうなんによろしくなー、とキャスターは手をひらひら振つて出ていった。

困つたセイバーがマスターであるいつわの方を見ると、近くの椅子に黒い上着を掛け万が一に備えて靴を履きながら安らかな眠りについている。

黒真珠のような艶やかな髪に、すらっとした耳鼻、紅い唇は思わず吸い寄せられそうな……。

セイバーはハツ、とその寝顔を見詰めながらよからぬことを考え出したことに気付くあわてて顔を振つた。

いつわの玲瓏たる美貌を眺め続けるとまさに朧とかすみ続けて見えてくる、あまりの美しさに理性が蕩けてくるのだ。

生前自分を律して公正であると心がけ続けた末に人の心がわからないとまで言われ

た自分の心をこうも簡単にかき乱すとは……。

部屋を出ていったキヤスターを睨みつけるがキヤスターはケルトの戦士らしい独自の価値観を持つており誇り高い、自分がうち倒した女戦士ならともかく寝入っているか弱い婦女子を襲うような卑劣さは持ち合わせていない男だ。

一度交わした約束はきちんと守り抜く義理堅さを持っているので、立香達を守ると言つたのなら守り通すだろう。

「——はあ、まつたく困つたものです」

死を迎える前に聖杯を手に入るという目的でサーヴァントとして様々なマスターに出会つた。

こちらと必要最低限しかコミュニケーションを取らないマスターだつたり、非力でサーヴァントに気をつけろと口を酸っぱくしても「大丈夫だと」言つて護衛を断つてサーヴァントに突撃したりするマスターにも困つたものだが、生前のブリテン時代を含めて容姿が飛び抜け過ぎていて対応に困るというのは初めてのことだつた。

どうにも調子が狂つて困る、今回の召喚も戦闘以外の方面でも一筋縄ではいかないようだとため息をついた。



美しい月夜の姿を遮る炎と黒煙のヴェールにより判りづらいが長かつた夜は終わり次の朝を迎えた。

本来なら朝靄を太陽の光がかき消し、鳥が囀り朝の調べを奏で始める時間であるが、骨だけの死者が跋扈しているこの場所ではいつわ達の耳に届くのは風が鳴く音ぐらいなものだ、その風音の中に笛のような鋭い音が響いた。

何かに気付いたセイバーがいつわに声をかけるより早く、椅子に掛けてあつた黒い上着が妖糸によりいつわのもとへとふわりと浮かび上がつたかと思うと金属に磁石が張り付くように毛布から出した手に收まり、飛び起きたいつわがそれを纏うと同時に手も触れずに部屋の引き戸が開く。

セイバーに体を抱えられたいつわが部屋から出ると背後から瓦礫が崩壊したのは次の刹那だった。

「合流しよう」

セイバーに降ろされたいつわは短くそう指示をするとそのまま女性三人のいる部屋に飛び込んだ。

「サーヴァントの手を逃れた藤丸立香を待っていたのはまたしても地獄だつた（裏声）」「いつもの調子にもどつたようでなにより」

どうやら一晩寝たらさすがに錯乱状態から通常の状態に戻ったようだ。

眠りについている間になんらかの耐性がついたのか魅了対策を心得ていて他のメンバーと違つて対処法をしらないはずの立香が何故か直接いつわの美貌を見て顔を赤らめはしても我を失うことはない様子だった。

しかしあくまでも耐性がついたのはいつわの美貌限定らしく立香の顔は恐怖で青ざめ足元はガクガクと震えており、気を紛らわせるために軽口を叩いてなんとかいつもと同じ精神状態を保とうと努力をしているのだといつわは察した。

こりや早めの方をつけたほうがいいなどいつわは思いつつ視線を部屋に移した。

「他の二人は？」

部屋の中では攻撃によりパニックになつたオルガマリーと呼吸を荒げて明らかに気負いすぎな様子のマシユをキヤスターがルーン魔術を使い鎮めている所であつた。

さらに視線を走らせると先ほどいつわが居た部屋のすぐ横にあるこの部屋は特に被害がない、キヤスターが防御用のルーン魔術を予め施していたようだ。

「便利だね、一家に一人ルーン使い」

「あいにくとそこまで使い勝手はよくねえよ、しかしアイツがまさか弓を持つとはな」「弓使いをアーチャーって言うんだから、そりや弓持つてるんじゃないの？」

キヤスターの発言に立香が疑問を持つ、セイバーは目を逸らした。

かつての自分の部下は弓使いとして名を馳せているくせに、矢を放たずに弦を弾いて風の刃を撃ちだす騎士だったからである。なお自分もサマーシーズンでは水鉄砲に聖剣を装着してアーチャーになる模様。

『立香くん、…大変言いづらいんだが弓を使わないアーチャーは結構多いんだ
うつそでしょ!?』

「聞いたことがあります、遠距離から何か投げたらアーチャー認定受けるぐらいには弓使うアーチャー少ない、らしいです」

「そうなの!?」

「なんでも銃で攻撃してもアーチャーですし、石投げてもアーチャー、なんなら放電攻撃しても、蹴鞠を蹴りだしてもアーチャーになるとか」

「アーチャー認定ガバガバア!?」

「アーチャーってなんだろうね…（哲学）

「貴方たち遊んでないで逃げるなり迎撃するなりなんとかしなさい！」

アーチャーとは何かを説明するためにサーヴァント銀河の話が長くなりそうになつている背後では、連続で射込まれている矢の衝撃で建物にひびが入り始めていた。

キヤスターの防御用ルーン魔術といつわが人知れず巻いていた妖糸の補強でも限界

が近い。

「こちらの戦力はサーヴァントが実質三騎、だが俺には遠距離から攻撃するアーチャーに同じ距離で対抗できる手段がない。ルーンはそういうのには向いていないんでな」

『セイバーはどうだい？』

「宝具を使えば可能ですが。……しかし私の宝具は魔力の消費が激しいのでこの後の戦いを考えると使わない方がいいでしよう。どうにかしてアーチャーに接近する必要がありますね」

「本命は聖杯を守っているというアーサー王。それ以外の残っているサーヴァントはバーサーカーとアーチャーだったわね？」

「おう、だがバーサーカーは何故かある場所から動かないんで厄介なのはアーチャーの野郎だけだ」

「なら次の為にいかに消耗を少なくして倒すかが問題ね、アーチャーはマシユの盾で攻撃を防ぎながら距離を詰めてセイバーとキヤスターで倒すというのが無難かしらね」

「貴女への負担は多いですが、大丈夫ですかマシユ？」

「は、はい、がんばります！」

魔術知識が皆無の立香は手持ち無沙汰な様子でアーチャーの攻撃により段々と鱗が入ってきている教室の壁を不安そうに見ていると、横でいつわはなにやら指をカタカタ

とキーボードを叩くように動かしているのが見える。

「秋さんなにしてるの？」

「伏兵が居ないか探つてる、……うん、アーチャーの場所もわかつた」

そう言うと何かを思いついたのかいつわは話し合いの輪に加わつた。

その背中に立香は決意を秘めた声をかける。

「……ねえ、わたしに手伝えることないかな」

なにもできないのはしようがないけどなにもしないのは嫌だ、と彼女は言つた。

この中で唯一の素人で魔術やサーヴァントみたいな超常はフイクションでしか認識していなかつたものが、自分に現在進行形で襲いかかる現状に気が気でないはずだ。

それでも勇気を振り絞っている姿にマシユは奮い立ち、英靈二人は好感を持ち、オルガマリーは呆れ、ロマニは困った顔をした。

そしていつわはこう告げた。

「それじやあ僕と一緒に囮になつて貰おうか」